

「会えば会うほど好きになる」 —英語の定型表現の習得における単純接触効果—

松田紀子*¹・村田健太郎*²

“The more I see it, the more I like it”:

The mere exposure effect in the acquisition of English formulaic language

Noriko MATSUDA, Kentaro MURATA

Abstract

The mere exposure effect refers to repeated exposure resulting in greater familiarity and, consequently, greater favorability. Although it is an unconscious cognitive process deeply related to daily activities, extant studies have not investigated the presence of the mere exposure effect in the acquisition of L2 formulaic language. This study examined whether the mere exposure effect can be observed among language learners, and if so, what differences can be observed between proficiency levels. This study included 40 undergraduate and graduate students learning English as a foreign language in Japan. The participants were asked to rate the favorability of 100 high- and low-familiarity formulaic sequences from an existing familiarity list. The results revealed a positive correlation between familiarity and favorability, suggesting the likelihood of the mere exposure effect. Furthermore, differences in favorability by proficiency level were observed only for low-familiarity formulaic sequences, indicating the possibility of accumulative influence of the mere exposure effect on the acquisition of formulaic language. These findings suggest the necessity of reconsidering the learning of formulaic language from the perspective of utilizing the learners' unconscious cognitive processes in the context of English language learning.

Keywords : ① English as a Foreign Language ② Formulaic Language ③ Mere Exposure Effect ④ Familiarity
⑤ Favorability

1. はじめに

接触回数が増えることで、ある対象に対する好意の度合いが高まる現象を、単純接触効果という (Zajonc, 1968). この「会えば会うほど好きになる」という現象は意識的な接触の影響を表しているものではなく、どこでどんな風に会ったか等の気づきを伴うことのない、「無意識の適応的認知過程の一つ」といわれている (川上, 2015). 我々が日常生活の中で接している TV やインターネット上の広告は、同じ商品

に何度も接触させることでその商品への親しみ易さやなじみ深さ、つまり親密度 (親近性) を高め、それによって好意度を高める (Monin, 2003) という、このシンプルな現象を利用したものとされている (Bornstein, 1989; 生駒, 2005; Fang et al., 2007). 興味深いのは、そうした広告に何度も接触することで、対象商品のみにとどまらず、扱っているブランドというカテゴリへの好意度が高まることである (川上・佐藤・吉田, 2010). こうしたカテゴリ全体へ単

受付: 令和 4 年 5 月 27 日 受理: 令和 4 年 6 月 27 日

*¹ 近畿大学総合社会学部 准教授 (応用言語学)

*² 近畿大学総合社会学部 2021 年度卒業生

DOI:10.15100/00022888

単純接触効果が般化することは多くの研究で示されており（例として川上・佐藤・吉田, 2010; Smith et al., 2008）, 好意度を高めるには対象そのものへの親密度だけではなく, 対象を包括するカテゴリ内での何らかの変化, つまりある種の新奇性ととの組み合わせが重要なことも知られている（例として川上・吉田, 2011; 松田・楠見・細見・長・三池, 2014）. 本稿は英語の定型表現の習得における, この単純接触効果の影響を調べたものである.

2. 先行研究

Zajonc (1968) は, 100名の学生を対象に母語（英語）における日常語とその対義語のペアを文字提示し, 好意度を評定してもらった結果, 出現頻度がより高い語の好意度が高いことを示し, それを単純接触効果と呼んだ. それ以降, 実験室で一日数回の人工的な接触を経験させる実験的枠組みを用いた様々な研究がなされ, 書きことばだけではなく, 図形 (Bornstein & D'Agostino, 1992) や人の顔 (Zajonc, 1968) に至るまで, 接触回数と好意度の関係が正の相関関係にあることが分かっている (Bornstein, 1989 等). ただし, 接触回数が多ければ好意度がどこまでも高くなるわけではなく, 過度に接触すると心的飽和が生じて好意度が低下することが知られており (Berlyne, 1970; Bornstein et al., 1990), 15回 から 40回 接すると心的飽和が生じるという研究もある (Bornstein, 1989; Gillebaart et al., 2012). また, こうした接触は知覚できないような状態で呈示 (閾下呈示) されても, 同様に効果がみられることも知られている (Bornstein & D'Agostino, 1992; Zajonc, 1968). こうした実験的な枠組みとは異なり, Moreland and Beach (1992) は接触日数という, 日常により近い形で単純接触効果を測った. 週1回の授業に0回, 5回, 10回, 15回出席したある学生 (サクラ) に対する好意度を他の受講生に尋ねた結果, 出席日数が多いほど, 好意度が高いという接触の積み重ねによる効果が見られた. こうした単純接触効果の説明理論として, 知覚的流暢性の誤帰属説

がよく知られている. 接触を繰り返し, 知覚的な流暢性が増すことで好意度に誤帰属され, この効果が生じるというものである (Bornstein & D'Agostino, 1992, 1994). 本稿は説明理論の検討を試みるものではないが, 実際, 単純接触効果が知覚的要素に敏感であること (Roediger & Blaxton, 1987) はよく知られている.

語句の読みに関する研究では, 接触回数は出現頻度という語に置き換えることができる. 出現頻度が高いとなじみ度である親密度が高く評価されるため, 両者に正の相関関係があることは多くの研究で認められている (e.g., 天野・近藤, 1999, 2000; Gernsbacher, 1984; Gordon, 1985; Hino & Lupker, 1998). 出現頻度というのは, 大量の言語資料を収集したデータベースであるコーパスにおいて, ある語句が出現した回数を数える客観的な指標である. その語句にどの程度接触したか, 対象となるグループ全体としての経験を表していると考えられ, 個人の経験を反映したものではない. それに対して親密度は多くの参加者にアンケートなどを使用して, 対象にどのくらいなじみがあるか, つまり見聞きしたことがあるかを評定してもらい, その平均値を求める主観的な指標である (天野・笠原・近藤, 2008). これもやはり対象となるグループ全体としての経験を反映したものと考えられる. 語句の読みの単純接触効果という観点から見ると, 親密度は出現頻度よりも重要な要素であるといわれている (Gernsbacher, 1984; 天野・近藤, 2000). 例として天野・近藤 (2000) の親密度データを使用した漢字の異体字 (新字体と旧字体) の研究では, 後者の親密度が好意度に直接影響する要因だということを明らかにしている (横山, 2006; 笠原・横山, 1998, 2000).

上記の語句の読みに関連する研究は対象を母語話者としているが, 対象が母語ではない言語を, 特に外国語として学習する場合はグループ全体としての出現頻度を知ることは非常に難しい. 語句の出現頻度は学習の際に使用した教材等に大きく左右され, 習熟度が異なるグループ間のばらつきは母語話者より大きいことは容易

に想像できる。これに対して、親密度は出現した回数ではなく5-7段階の評定値であり、出現頻度のような大きなばらつきは見られないと考えられる。英語の学習者を対象とし、単語の読みの親密度データを測ったものとしては横川（編）（2006）や西出・水本（2009）、定型表現の親密度データを測ったものとしては金澤（編）（2020）がある。

定型表現は外国語でコミュニケーションをとる上で欠かせない言語知識（Wray, 2002; Pawley & Syder, 1983）だといわれている。英語母語話者を対象に分析した研究では、話しことばの3割（Foster, 2001）、または書きことばでも話しことばでも約半分がそれ以上（Erman & Warren, 2000）が定型表現から成り立っていると言われている。英語では formulaic language, chunks, clichés, collocations, fixed expressions, idioms, lexical phrases, set phrases, multi-word units (MWU), multi-word expressions (MWE), lexical bundles 等の用語があり、応用言語学、認知言語学、コーパス言語学等の幅広い研究分野で扱われている。定型表現には様々な定義があるが（例として Wray, 2002, 2019, Siyanova-Chanturia & Pellicer-Sanchez, 2019 等）、定型表現が（2語以上から成り立っているにも関わらず）一つの語彙項目として心内に想定する辞書（メンタルレキシコン）内に貯蔵され、検索されるという「全体的処理仮説」を支持するもの（Wray, 2002, 2019）と、必ずしもひとまとまりの語彙項目としては捉えないもの（Siyanova-Chanturia & Pellicer-Sanchez, 2019）がある。定型表現の長さは学習者の親密度の評定に大きな影響を与えない可能性はある（松田, 2020, p.47）ものの、学習者のメンタルレキシコン内における語彙表象が、学習の積み重ねによって変容する不完全さを抱えていることを考えると、後者の方がより学習者の実態を捉えていると考えられる。そのため、本稿では以下の Siyanova-Chanturia and Pellicer-Sanchez (2019) の定義を使用する。

FL, as conceived in this book, may com-

prise strings of letters, words, sounds, or other elements, contiguous or non-contiguous of any length, size, frequency, degree of compositionality, literality / figurativeness, abstractness and complexity, not necessarily assumed to be stored, retrieved or processed whole, but that necessarily enjoy a degree of conventionality, or familiarity among (typical) speakers of a language community or group, and that hold a strong relationship in communicating meaning.

(Siyanova-Chanturia & Pellicer-Sanchez, 2019, p. 5)

「本書でいう FL (= Formulaic Language) とは、文字、単語、音、その他の要素の連なりであり、連続または非連続で、長さ、サイズ、頻度、構成性、逐語性／比喩性、抽象性、複雑性を問わず、必ずしも全体として記憶、検索、または処理されることを前提としてはいないが、ある言語コミュニティやグループの（典型的な）話者の間では必然的にある程度の慣習性や親密度を持ち、意味の伝達に強い関連を持つものを含んでいる。（第一著者の訳）」

英語を外国語として学ぶ日本人英語学習者が定型表現を学習する状況を考えると、定期テストや課題の提出のために使用教材を復習する等、同じような文脈で定型表現に何度も触れるということもあるだろうし、発表のためにインターネットで情報収集する等、異なる文脈で定型表現に触れることもあるだろう。後者の場合、ある種の新奇性との組み合わせが起こっているということにもなる。日々の接触の積み重ねが単純接触効果を生む（Moreland & Beach, 1992）のであれば、定型表現の学習においても同様にこの「無意識の適応的認知過程」（川上, 2015）がみられる可能性は高い。学習経験が豊富で習熟度が高い学習者ほど、定型表現への接触回数が増すことで親密度が高くなり、好意度

が上がっていくことは予想できる。それに対して、学習経験が浅い場合は、接する定型表現自体が限られてくる可能性があり、単純接触効果が見られない定型表現が出てくることも考えられる。しかし、英語を外国語として学ぶ日本人英語学習者を対象として、英語の定型表現の習得に単純接触効果が見られるかどうか、つまり親密度と好意度の関係を調査した研究は管見の限り見当たらない。そのため、以下の2つのリサーチクエスチョンをたてた。

- (1) 英語の定型表現の習得においても単純接触効果が見られ、接触回数が多いほど親密度が高まり、好意度が高くなるか。
- (2) 英語の定型表現への好意度は、英語学習経験が豊富な英語学習者ほど高くなり、学習経験が浅ければ低くなるか。

仮説は以下の通りである。

- (1) 英語学習者の定型表現における親密度と好意度の評定値の間には正の相関がある。
- (2) 習熟度が高い英語学習者の方が、習熟度が低い英語学習者よりも好意度の評定値が高く、それは親密度が低い定型表現において顕著である。

3. 方法

3.1 参加者

英語を外国語として学び、英語圏での留学経験や生活経験がない大学生及び大学院生である日本人英語学習者42名(女性15名, 男性27名)が研究に参加した。そのうちの2名は回答の大部分を最大値としており、好意度評定平均値が全体の評定平均値の $\pm 2SD$ から外れていたため、分析から除外した。

3.2 材料

本研究には先述の金澤(編)(2020)のフォーミュラ親密度リストを使用した。これはMartinez and Schmitt(2012)をベースに作成した501項目の英語の定型表現から成るリストで、英語を外国語として学ぶ11大学1012名の

日本人英語学習者が各定型表現の親密度を7段階(7=とてもよく見聞きする, 1=全く見聞きしない)で評定した平均値が記されている。このリストから親密度の評定平均値上位50項目(親密度高条件, 例としてhave to, a lot, kind of)と下位50項目(親密度低条件, 例としてled by, a mere, the lot)を抽出し、各定型表現の好意度を7段階(7=好き, 1=嫌い)で評定してもらった。定型表現の出現頻度についてはイギリス英語1億語のコーパスで、90パーセントが書きことば、10パーセントが話しことばのデータから構成されているBritish National Corpus(BNC)を使用した。本研究では小学館BNC Online(ネットアドバンス社)を通してBNC World Editionと呼ばれるバージョンを使用した。

3.3 手続き

調査はGoogle Formを使用し、同意に基づいてインターネット上で実施された。その際、あまり深刻に悩まずに、直観的に評定を行うように指示し、1語1語の英単語としてではなく、定型表現全体としての好意度を評定してほしいこと、意味を知っているかどうかを問う調査ではないこと、所要時間が目安として1ページ2分、全体で約20分、1ページにつき10項目、合計10ページあることを明示し、各ページ冒頭に再度どのように評定するかをリマインダーとして載せて実施した。その際、ランダム呈示機能を使用し、各ページにおける項目の順番は参加者ごとに異なるようにした。また、最後に自身の英語力4技能(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)に関して、10段階(10=英語母語話者と同じくらいの英語力, 1=英語力が全くない)で自己評価してもらった($N=40$, リスニング: $M=3.85$, $SD=2.18$, スピーキング: $M=3.55$, $SD=2.05$, リーディング: $M=4.78$, $SD=2.02$, ライティング: $M=4.03$, $SD=2.11$)。各参加者の4技能の平均値を相対的な英語の習熟度とみなし、40人の中央値($Mdn=3.63$)よりも数値が高いグループ20名を自己評価習熟度高群($n=20$, M

= 5.64, $SD = 1.18$), 中央値よりも数値が低いグループを自己評価習熟度低群 ($n = 20, M = 2.46, SD = 0.82$) とした。こうした習熟度の分類には、民間の試験等の客観的な指標を合わせて使用すべきであるが、Blanche and Merino (1989) によると客観的な能力と自己評価の相関係数は、 $r = .50$ から $.60$ の範囲であり、今回のような大まかな分析には十分耐えうると判断した。さらに客観的な指標となりうる TOEIC の点数や英検の資格等を持っている場合は、自由記述で具体的な点数や級を記入してもらった。21 名の回答を得たが、自己評価習熟度高群は TOEIC のスコア範囲は 450~850 点、英検では 3 級~準 1 級であり、自己評価習熟度低群は TOEIC のスコア範囲は 350~485 点、英検では準 2 級~2 級であった。英検の結果に関しては課題が

残るが、TOEIC のスコア範囲から見た場合は習熟度自己評定値と客観的なデータに大きな食い違いは見られなかった。

まず、親密度と好意度の評定値から、単純接触効果がみられるかどうかをピアソンの積率相関を使用して検討した。次に自己評価習熟度別に親密度の高・低条件と好意度評定値の関係をみるのに、2 (自己評価習熟度：高群・低群) \times 2 (親密度：高条件・低条件) の 2 要因分散分析を使用した。以下、結果を順に報告する。

3.4 結果

3.4.1 単純接触効果の有無

表 1 は各項目の平均値と標準偏差を示したものである。好意度の評定平均値は親密度高条件の方が大きいことが分かる。また、図 1 は親密

表 1 各項目の平均値と標準偏差 ($N = 40$)

	親密度	好意度	出現頻度 (BNC)	語数	音節数	文字数
親密度高条件 (SD)	6.30 (0.17)	5.43 (0.29)	11894.76 (30478.83)	2.20 (0.40)	2.32 (0.51)	7.36 (1.79)
親密度低条件 (SD)	3.03 (0.33)	3.77 (0.32)	1221.62 (984.79)	2.52 (0.74)	2.90 (1.02)	9.04 (3.31)

数値は平均値。()内は標準偏差を示す。

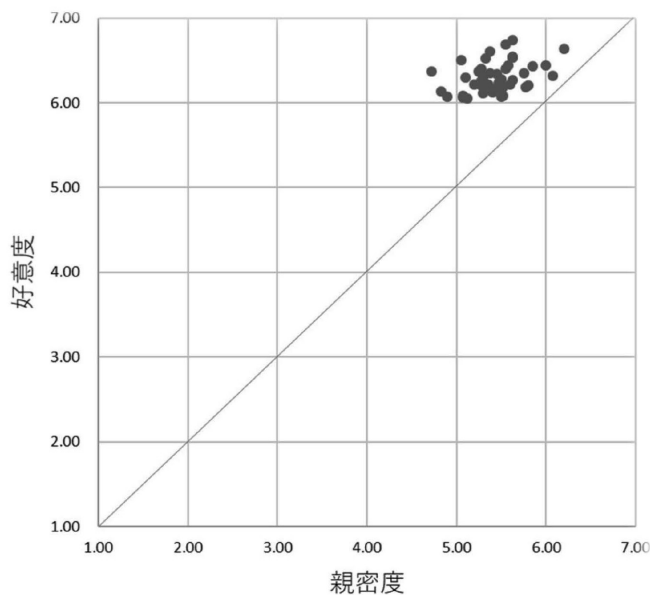


図 1 親密度高条件の英語の定型表現における好意度評定値と親密度評定値の関係

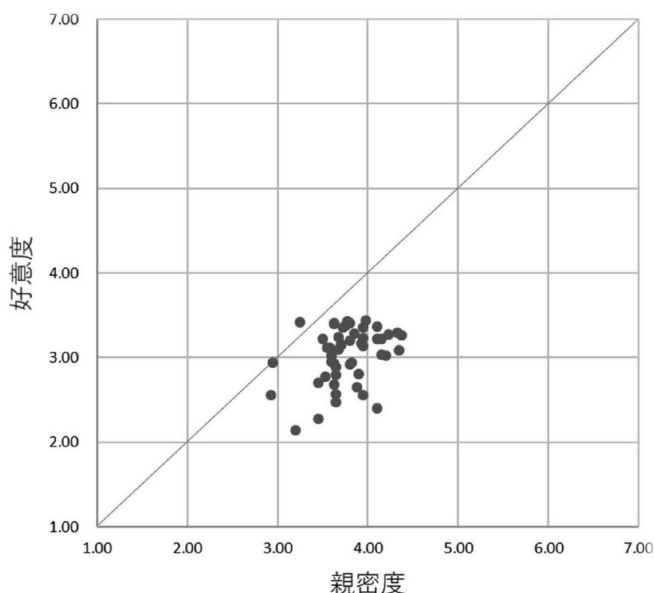


図2 親密度低条件の英語の定型表現における好意度評定値と親密度評定値の関係

度高条件，図2は親密度低条件の英語の定型表現について好意度と親密度の評定値の関係を示した散布図である。

親密度高条件においてピアソンの積率相関係数を計算した結果，好意度評定値と親密度評定値の間に有意な正の相関が見いだされた ($r(48) = .38, p = .007, 95\% \text{ CI } [.11, .59]$)。相関は中程度の強さであり，親密度高条件では，親密度評定が高いほど好意度評定値も高い傾向があるため，英語の定型表現の習得において単純接触効果が見られた可能性が高い。なお，好意度と他の項目，対数変換した出現頻度 ($r(48) = -.17, p = .24, 95\% \text{ CI } [-.43, .11]$)，語数 ($r(48) = .15, p = .31, 95\% \text{ CI } [.14, .41]$)，音節数 ($r(48) = -.01, p = .95, 95\% \text{ CI } [-.29, .27]$)，文字数 ($r(48) = .16, p = .28, 95\% \text{ CI } [-.13, .42]$) といずれも相関がほとんどないことがわかった。

親密度低条件においてピアソンの積率相関係数を計算した結果，好意度評定値と親密度評定値の間に有意な正の相関が見いだされた ($r(48) = .34, p = .01, 95\% \text{ CI } [.07, .57]$)。親密度高条件と同じで，相関は中程度の強さであり，親密度低条件では，親密度評定が低いほど好意

度評定値も低い傾向があるため，単純接触効果が見られた可能性が高い。親密度高条件と同じように好意度と対数変換した出現頻度には相関がほとんどなく ($r(48) = .02, p = .87, 95\% \text{ CI } [-.26, .30]$)，一方で語数 ($r(48) = -.41, p = .003, 95\% \text{ CI } [-.62, .15]$)，音節数 ($r(48) = -.34, p = .02, 95\% \text{ CI } [-.56, -.07]$)，文字数 ($r(48) = -.42, p = .003, 95\% \text{ CI } [-.62, -.16]$) といずれも有意な負の相関が見られた。相関は中程度の強さだが，語数，音節数，文字数が長くなればなるほど好意度が下がっていくのが親密度低条件のみなのは興味深い。

3.4.2 習熟度別の分析

表2は親密度高条件及び低条件の英語の定型表現における自己評価習熟度高群と低群の好意度の評定平均値と標準偏差を示したものである。また，図3は親密度高条件及び低条件における自己評価習熟度高群と低群の好意度の評定平均値と標準誤差を示したものである。

自己評価習熟度の違いを参加者間とし，親密度高・低条件を参加者内に配置した2要因分散分析¹を行った結果，自己評価習熟度が有意で

表2 親密度高・低条件の英語の定型表現における自己評価習熟度高・低群の好意度の評定平均値と標準偏差

	親密度	好意度	
		自己評価習熟度高群 ($n = 20$)	自己評価習熟度低群 ($n = 20$)
親密度高条件 (<i>SD</i>)	6.30 (0.17)	5.54 (0.70)	5.32 (0.80)
親密度低条件 (<i>SD</i>)	3.03 (0.33)	4.26 (0.76)	3.28 (0.74)

数値は評定平均値。()内は標準偏差を示す。

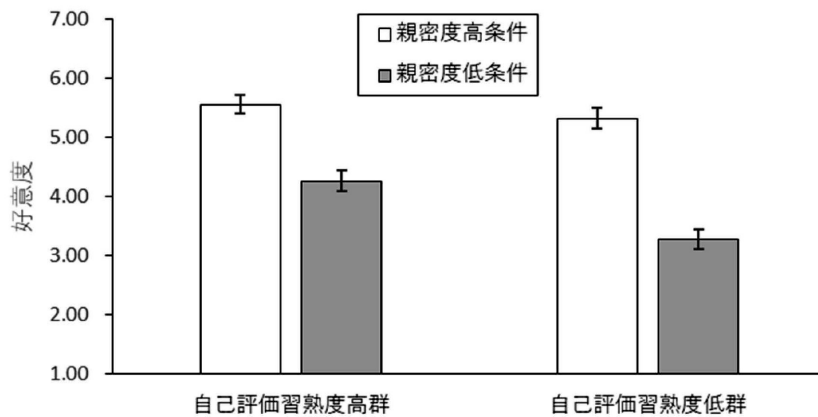


図3 親密度高・低条件の英語の定型表現における自己評価習熟度高・低群の好意度の評定平均値と標準偏差

あり ($F(1, 38) = 10.66, p = .002, \eta_p^2 = 0.22, 1-\beta = 1.00$), 親密度高・低条件も有意であり ($F(1, 38) = 125.60, p < .001, \eta_p^2 = 0.77, 1-\beta = 1.00$), 自己評価習熟度×親密度高・低条件の交互作用も有意であった ($F(1, 38) = 6.47, p = 0.02, \eta_p^2 = 0.15, 1-\beta = 0.99$).

自己評価習熟度×親密度高・低条件の交互作用が有意であったので単純主効果検定 ($\alpha = 0.15$) を実施した結果, 自己評価習熟度の単純主効果は, 親密度低条件において有意であった ($F(1, 38) = 17.06, p < .001, \eta_p^2 = 0.31$). つまり, 親密度低条件において自己評価習熟度低群の好意度評定平均値が自己評価習熟度高群の評定平均値よりも有意に小さいことが示された. さらに親密度高・低条件の単純主効果は, 自己評価習熟度高群においても ($F(1, 38) = 94.54, p < .001, \eta_p^2 = 0.71$), 自己評価習熟度低群において

も有意であった ($F(1, 38) = 37.53, p < .001, \eta_p^2 = 0.50$). そのため, 習熟度に関わらず, 好意度評定平均値は親密度低条件よりも親密度高条件において有意に大きいことが示唆された.

4. 考察

「無意識の適応的認知過程」(川上, 2015) とされている単純接触効果が英語の定型表現の習得において見られるのか, 見られるとしたら習熟度別にどのような特徴があるかを調べるために既存の親密度リストを使用して好意度を調査した. 以下に仮説に沿って内容を整理する.

まず, 単純接触効果の有無を測るための分析を行ったが, 1つ目の仮説である「(1) 英語学習者の定型表現における親密度と好意度の評定値の間には正の相関がある。」を支持する結果となった. 親密度 (7 = とてもよく見聞きす

る、1 = 全く見聞きしない) と好意度 (7 = 好き, 1 = 嫌い) の評定値の間には中程度の相関があったが、先行研究で見られたように、接触回数が多いほど親密度が高まり、好意度が高くなるという単純接触効果を示す現象と合致しており、外国語として学ぶ英語の定型表現の習得においても、この効果が見られる可能性が高いことが分かった。本研究では実験的な枠組みで接触回数を増やしてその変化の様子を調べたわけではないが、Moreland and Beach (1992) が接触日数という変数を使用して接触の積み重ねによる単純接触効果を測ったように、学習者が今まで英語の定型表現に触れてきた累積的な単純接触効果を、大まかにではあるが測定できた可能性が高いことは意義があると考えられる。また、親密度高条件では語数、音節数、文字数と好意度の間に相関関係がなかったが、親密度低条件では語数、音節数、文字数が長くなればなるほど好意度が下がっており、学習者にとって定型表現の長さが好感度を下げる要因になっていると考えられる。先述のように単純接触効果は知覚的要素に敏感であると言われおり、学習者の場合、定型表現の長さが知覚的な流暢性の向上を妨げる要因になることは考えられる。しかし、知覚的流暢性の向上と密接に関係している親密度は定型表現の長さの影響を受けない可能性が高い (松田, 2020, p.47) ため、むしろ長いという事実そのものが接触時にある種のネガティブな感情を生みだして好感度を下げていると考える方が自然だろう。

次に習熟度別の分析として習熟度×親密度の分析を行ったが、2つ目の仮説である「(2) 習熟度が高い英語学習者の方が、習熟度が低い英語学習者よりも好意度の評定値が高く、それは親密度が低い定型表現において顕著である。」を支持する結果となった。自己評定による習熟度ではあるが、学習者の好意度評定平均値を比較すると、英語学習経験が豊富であると考えられる自己評定習熟度高群の方が低群よりも各数値が高い。また、親密度が低い定型表現のみに有意差があったことから、親密度が高い定型表現では、過度に接触しているために心的飽和

(Berlyne, 1970; Bornstein et al., 1990) が生じている可能性を指摘できる。さらに、学習経験が浅いと考えられる自己評定習熟度低群の場合は接してきた定型表現自体が限られており、単純接触効果が十分に見られない定型表現が存在した可能性もある。習熟度別の各グループ内で、親密度高条件と親密度低条件の定型表現の好意度の評定値には有意差が見られたことから、総じて、自己評価習熟度は学習経験の差をある程度反映している可能性が高いと考えられる。

本研究では、ある一時点での大まかな累積的単純接触効果を測ることができた可能性が高いと考えている。「一時点での」と述べる理由は、先述のように、様々な文脈で同じ定型表現に接すれば、新奇性が常に生じていることになり、単純接触効果は強化されながら (川上・吉田, 2011; 松田・楠見・細見・長・三池, 2014 等) 変容していくと考えているからだ。その変容の在り方について、英語の定型表現にとどまらず、英語というカテゴリ全体へ般化 (川上・佐藤・吉田, 2010; Smith et al., 2008) していく可能性を秘めていてほしいと、教員ならば考えるのではないだろうか。一方で、好意度をあげるのに単なる接触が有効であるとわかっていても、物理的な要因 (本研究では定型表現の長さ) によって好意度が変容する可能性が高い上、ネガティブな感情を抱き始めればそれが接触によって強化される可能性があるため、好意度を上げる有効な方法を提示するのは困難だということも予測できる。本研究では、学習経験が豊富だと考えられるグループの方が、英語定型表現への好意度が高いというシンプルな結果が出ている。そのことを踏まえると、英語定型表現の習得には「無意識の適応的認知過程の一つ」、つまり「会えば会うほど好きになる」という現象が関わっているということを知識として学習者に伝えることが、自律的学習者としての今後の成長を促すことに有効であると考えられる。

5. 結論

本研究は英語を外国語として学ぶ学習者を

対象に、英語定型表現の習得における単純接触効果の有無とその実態を親密度と好意度、および学習者の習熟度の分析から考察した。本研究では大まかな、累積的単純接触効果を見ることができた可能性が高いと考えているが、同時に様々な限界や課題も存在する。まず、本研究はあくまで累積的な単純接触効果の結果のみを見ていて、実際に接触回数を重ねることで学習者の好意度が変化するかどうかは見ていない。全体像を捉えるには、今後はこうした変化の様子も合わせて多角的に見ていくことが必要だと考える。また、無意識の接触を積み重ねることで生まれる単純接触効果と、学習という意識的な行為との間には本質的な隔りがあると考えられる。本研究で得られた好意度は学習に関わる接触によって形成されたものであることは予測できるが、英語学習という文脈の中で単純接触効果が見られたとして、これをどう生かすか、熟考が必要だと考える。さらに、本研究では習熟度について自己評定を採用しているが、今後は民間の試験等の客観的な指標を合わせて使用すべきだと考える。

英語の定型表現の習得において単純接触効果が見られ、好きという感情と学びがおぼろげながら関係していることは興味深く、今後もこうした研究を続けることで学びというものの本質をとらえるための有益な示唆が得られるのではないかと考える。

註

1 p 値の調整には Benjamini & Hochberg (1995) の方法を用いた。

謝辞

本研究に快くご協力くださった参加者の皆様に、心より感謝申し上げます。

付記

本研究は第一著者の指導の下、村田健太郎が近畿大学総合社会学部に提出した卒業論文のデータを元に、再構成、再分析を行ったものである。

参考文献

- 天野成昭, 笠原要, & 近藤公久. (2008). *NTT データベースシリーズ「日本語の語彙特性」* (第9巻, 親密度) 東京: 三省堂.
- 天野成昭, & 近藤公久. (1999). *NTT データベースシリーズ「日本語の語彙特性」* (第1巻, 親密度) 東京: 三省堂.
- 天野成昭, & 近藤公久. (2000). *NTT データベースシリーズ「日本語の語彙特性」* (第7巻, 頻度) 東京: 三省堂.
- Benjamini, Y., & Hochberg, Y. (1995). Controlling the false discovery rate: a practical and powerful approach to multiple testing. *Journal of the Royal Statistical Society: Series B (Methodological)*, 57(1), 289–300.
- Berlyne, D. E. (1970). Novelty, complexity, and hedonic value. *Perception & Psychophysics*, 8(5), 279–286.
- Blanche, P., & Merino, B. J. (1989). Self-assessment of foreign-language skills: Implications for teachers and researchers. *Language Learning*, 39(3), 313–338.
- Bornstein, R. F. (1989). Exposure and affect: overview and meta-analysis of research, 1968–1987. *Psychological Bulletin*, 106(2), 265–289.
- Bornstein, R. F., & D'Agostino, P. R. (1992). Stimulus recognition and the mere exposure effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63(4), 545–552.
- Bornstein, R. F., & D'Agostino, P. R. (1994). The attribution and discounting of perceptual fluency: Preliminary tests of a perceptual fluency/attributional model of the mere exposure effect. *Social Cognition*, 12(2), 103–128.
- Bornstein, R. F., Kale, A. R., & Cornell, K. R. (1990). Boredom as a limiting condition on the mere exposure effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58(5), 791–800.
- Erman, B., & Warren, B. (2000). The idiom principle and the open choice principle. *Text &*

- Talk, 20(1), 29–62.
- Fang, X., Singh, S., & Ahluwalia, R. (2007). An examination of different explanations for the mere exposure effect. *Journal of Consumer Research*, 34(1), 97–103.
- Foster, P. (2001). Rules and routines: A Consideration of their role in the task-based language production of native and non-native speakers. In M. Bygate, P. Skehan, & M. Swain (Eds.), *Researching pedagogic tasks second language learning, teaching and testing* (pp. 75–93). London: Routledge.
- Gernsbacher, M. A. (1984). Resolving 20 years of inconsistent interactions between lexical familiarity and orthography, concreteness, and polysemy. *Journal of Experimental Psychology: General*, 113(2), 256–281.
- Gillebaart, M., Förster, J., & Rotteveel, M. (2012). Mere exposure revisited: The influence of growth versus security cues on evaluations of novel and familiar stimuli. *Journal of Experimental Psychology: General*, 141(4), 699–714.
- Gordon, B. (1985). Subjective frequency and the lexical decision latency function: Implications for mechanisms of lexical access. *Journal of Memory and Language*, 24(6), 631–645.
- Hino, Y., & Lupker, S. J. (1998). The effects of word frequency for Japanese Kana and Kanji words in naming and lexical decision: Can the dual-route model save the lexical-selection account?. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 24(5), 1431–1453.
- 生駒忍. (2005). 潜在記憶現象としての単純接触効果. *認知心理学研究*, 3(1), 113–131.
- 金澤佑. (編) (2020). *フォーミュラと外国語学習・教育: 定型表現研究入門*. くろしお出版.
- 川上直秋. (2015). 単純接触効果と無意識われわれの好意はどこから来るのか. *エモーション・スタディーズ*, 1(1), 81–86.
- 川上直秋, 佐藤広英, & 吉田富二雄. (2010). 単純接触がカテゴリ評価に与える効果——IATとGNATを用いて——. *心理学研究*, 81(5), 437–445.
- 川上直秋, & 吉田富二雄. (2011). 多面的単純接触効果——連合強度を指標として——. *心理学研究*, 82(5), 424–432.
- Martinez, R., & Schmitt, N. (2012). A phrasal expressions list. *Applied Linguistics*, 33(3), 299–320.
- 松田憲, 楠見孝, 細見直宏, 長篤志, & 三池秀敏. (2014). 選好に及ぼす呈示回数と背景の影響——自動車と風景画像を用いた検討——. *心理学研究*, 85(3), 240–247.
- 松田紀子. (2020). 全体的傾向. In 金澤佑. (編). *フォーミュラと外国語学習・教育: 定型表現研究入門*. (pp.41–48). 東京: くろしお出版.
- Monin, B. (2003). The warm glow heuristic: when liking leads to familiarity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85(6), 1035–1048.
- Moreland, R. L., & Beach, S. R. (1992). Exposure effects in the classroom: The development of affinity among students. *Journal of Experimental Social Psychology*, 28(3), 255–276.
- 西出公之, & 水本篤. (2009). 英単語 8000 語についての親密度測定を試み. *都留文科大学大学院紀要*, 13, 57–92.
- Pawley, A., & Syder, F. H. (1983). Two puzzles for linguistic theory: Nativelike selection and nativelike fluency. In J. C. Richards & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp. 191–226), London: Longman.
- Roediger, H. L., & Blaxton, T. A. (1987). Effects of varying modality, surface features, and retention interval on priming in word-fragment completion. *Memory & Cognition*, 15(5), 379–388.
- 笹原宏之, & 横山詔一. (1998). 異体字選択に影響する要因. *計量国語学*, 21(7), 291–310.
- 笹原宏之, & 横山詔一. (2000). 異体字に対する

- るなじみと好み——接触印象・使用頻度との関係——. *日本語科学*, 8, 110-125.
- Smith, P. K., Dijksterhuis, A., & Chaiken, S. (2008). Subliminal exposure to faces and racial attitudes: Exposure to Whites makes Whites like Blacks less. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44(1), 50-64.
- Siyanova-Chanturia, A., & Pellicer-Sánchez, A. (2019). Formulaic language: Setting the scene. In A. Siyanova-Chanturia & A. Pellicer-Sánchez (Eds.), *Understanding formulaic language: A second language acquisition perspective*. (pp.1-15). New York: Routledge.
- Wray, A. (2002). *Formulaic language and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University.
- Wray, A. (2019). Concluding question: Why don't second language learners more proactively target formulaic sequences? In A. Siyanova-Chanturia & A. Pellicer-Sánchez (Eds.), *Understanding formulaic language: A second language acquisition perspective*. (pp.248-269). New York: Routledge.
- 横川博一. (編) (2006). *日本人英語学習者の英単語親密度 文字編: 教育・研究のためのデータベース*. 東京: くろしお出版.
- 横山詔一. (2006). 字体選好は新聞漢字頻度から予測可能か. *計量国語学*, 25(4), 181-194.
- Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 1-27.